

[研究報告]

小学校における観光を題材とした学びの現状と課題 ——札幌・対馬・石垣の3市への現地調査をもとにして——

寺本 潔

要 約

小学校における観光の学びは、未だ教科や領域の中に正式なポジションを獲得してはいない。関連が深い社会科4年の教科書において「自然や伝統文化をいかした県内のまちづくり」の紹介の事例として、観光地や観光資源が扱われるにとどまっている。本研究は、社会科における観光学習を扱っている。観光を支える人材育成の視点から、3つの市において調査を行った。その結果、カリキュラムへの導入にあたり、必要性和効果が明らかとなった。

キーワード：人材育成, 観光地, 観光プラン, 地図, 社会科

I はじめに

「社会に開かれた教育課程」という理念を確かなものにするには、知識理解の質を高め、確かな学力を育成することが重要になる。今回の学習指導要領改訂では、「何ができるようになるか」を明確化しなくてはならない。資質・能力を育成する教育課程の編成と実施が強く求められ、「育成すべき資質・能力は何か」「子どもが内に持っているものをいかに育ていけるか」をしっかりと把握することが大事となっている。本稿で強調したい点は、こうした要請に対して近年、変化が著しい観光をめぐる動向と絡め、観光産業が地域のリーディング産業である自治体において、観光を通じた学びこそがその要請に応える一つの実例になるのではという提案である。なぜなら、少子高齢化や過疎化は地方がより深刻化しつつあり、このままでは人口減少を食い止めることができない事態に陥っているからである。地域社会を持続的な姿で維持するために、定住人口は増やせなくても、観光などによる交流人口や関係人口を増やすことで、地域社会の活力を維持できるかもしれない。観光の学びは、地域の観光力を人材育成の観点から支え、地域資源へのまなざしや利活用力を磨く上で、まさに地方の自治体にとって必須の教育施策として浮かび上がらなくてはならないのではないだろうか。

一方、観光事象の基本的事項である各種の観光産業の位置づけや観光資源、観光地形成、観

光ルートなどの題材は、現時点では検定教科書（社会科）の記載内容には一切盛り込まれておらず、観光ホスピタリティや接遇、観光英語など観光の仕事理解に関係する内容においてさえ、道徳や特別活動、外国語活動を見てもほとんど扱われていない。

他方、学校や地域の特色をいかした「総合的な学習の時間」の事例では、地域によっては観光の題材が選ばれ、子ども観光ガイド体験などのケースも散見されている（例えば、7年前に筆者が指導助言した香川県琴平町の小中連携で推進された「まちづくり科」（文科省教育開発研究）では、琴平宮参詣客相手に地元の小学生が観光ガイドを実施）。

このような現状において、本稿においては、インバウンド観光で大きく伸びている国内の3つの自治体を事例に寺本が現地調査を行い、関係者に聞き取り調査をした内容を報告したい。なお、3市を選定した理由については、各市に関する報告書の冒頭に記した。

Ⅱ 北海道札幌市における観光教育調査

札幌市を選んだ理由は、後述する対馬市や石垣市のようにインバウンドの急増だけによるものでなく、道庁教育委員会のHP上で「北海道ふるさと教育・観光教育推進事業」のサイトを見出したからである。また、北海道の社会科教育連盟（教員の会員数約600名）の事務局長である新保元康（札幌市立屯田小学校）校長（当時）が、「雪」や「道」をテーマに社会科教員による教材開発を活発に展開しており、北海道開発局やその外郭団体が支援を行っており、観光教育に関する教材・指導法開発に関する何らかの有益な手がかりが得られるのではないかと判断したからである。札幌市は、中心部の再開発に伴い、観光の魅力がアップしており、2018年（ブランド総合研究所調査）都道府県人気ランキング調査でも第1位の都道府県が北海道（都市ランキングでも札幌市は第4位）であることも相俟って、国内観光地としても注目が集まっているエリアである。訪問先ごとに現地で聞き取り調査をした結果を述べてみたい。

①北海道庁義務教育課

あらかじめ、メールで問い合わせておいた次の4点に関する質問に応じてもらった。第1点は、明治2年に設置された「北海道」から本年度で150年目に当たることから、児童生徒への北海道学習をどのように計画しているか、について尋ねたところ「子どもたちが、ふるさと北海道の歩んできた道を振り返り、郷土に対する愛着や誇り、郷土をさらに発展させていこうとする態度を育てることができるよう、北海道にゆかりのある先人の伝記を題材にした道徳の副読本『きた・ものがたり』（小学校高学年用・全34頁）を刊行し平成30年に小学校現場に配布済という。掲載人物は、北海道の命名者である松浦武四郎やアイヌ文化継承の知里幸恵、作家の三浦綾子等16人の伝記である。

第2点として観光や地域資源に特化した刊行物はあるかと質問したところ、『北海道おもて

なしハンドブック』（北海道道德教育推進委員会作成 全14頁A5版）が1・2年，3・4年，5・6年，中学校向けの4冊作成し配布されていた。中味は挨拶やおじぎ，思いやりなどをイラストを交えて簡単に解説されているだけで特段観光客相手を意識した内容ではなかった。唯一，「私たちのふるさと」と題し知床半島とヒグマ，アイヌの楽器，色丹島の自然などの写真が6点掲載してあるのみである。なお4冊の内容は重複している。第3点として道内に観光資源学習を進めている自治体や学校はあるかとの質問に対しては教育委員会として30地区程度に対しアイヌ文化，北方領土，観光の各テーマから学校が1つを選択しており，「北海道ふるさと教育・観光教育推進事業」が平成23年度から展開されている。「観光」を選んだ小学校の報告書を拝見したところ，ほとんどが「ふるさと学習」の域にとどまっている内容であった。例えば小樽市色内小学校では市の歴史文化（ニシン漁や北前船，商人）を調べて地元のNPOの「おたる案内人」（人力車傳夫）の支援でガイド体験も実施している。「実践の成果」欄には，「指導計画のまとめ・表現の段階に観光ガイド体験を位置付けたことにより，単元を通した学習活動に目的意識が生まれ，探究的な学習の充実を図ることができました。」との記述があり，注目される。

また，乙部町明和小学校ではサケ学習を行い，スカイプを活用し定置網漁の実況中継を体験している。第4点として北海道遺産の教育活用について尋ねたところ，平成28年より北海道遺産フォトコンテストにジュニア部門を設け，子どもたちの応募の枠があるものの，遺産を扱った各学校の取り組みは把握していないとのことであった。北海道では教育の指定校（モデル校）が決まれば，観光教育の出前授業を教育庁から依頼することは可能であるとのことであった。

②北海道札幌市教育委員会指導課

札幌市では市の多くの小学校で使用されている社会科副読本『わたしたちの札幌』（3年・4年全カラー印刷）を紹介してもらった。これは北海道社会科連盟が監修し北海教育新聞社が発行している副読本である。4年上巻・A5判横全64ページには，p15に「世界とつながる北海道」が次のように記述されている。「北海道の空のげん関 札幌からおよそ40キロメートルのところに新千歳空港があります。新千歳空港は，国内各地や外国の空港との間に，1日およそ390便の飛行機が発着し，約5万8千人が利用しています。ですから『北海道の空のげん関』とよばれています。1992（平成4）年7月に，ターミナルビルが完成し，鉄道が地下に直せつ乗り入れるようになり，札幌駅と新千歳空港駅を結ぶ『エアポート号』が1日およそ110便走っています。また，札幌駅前や地下鉄大谷地駅のバスターミナルなどと新千歳空港を結ぶれんらくバスも走っています。」また，p17には「外国とのむすびつき 新千歳空港と外国の空港との結び付きも年々強まり，（中略）海外との定期便も，ロシアのユジノサハリンスク，韓国のソウル・プサン・テグ，中国の北京・天津・上海・香港，台湾の台北・高雄，タイのバンコク，マレーシアのクアラルンプール，アメリカのグアム・ホノルルそして，シンガポールと15あり，

週300便が飛んでいます。(後略)」と空港機能の紹介が詳しくなされている。4年下巻の中の「北海道の特色ある地いきと人々のくらし」の項目には、「おかしのまち・帯広市」「観光と農業のまち・ニセコ町」「歴史のある港まち・函館市」が詳しく紹介され、いずれも観光客の増加が触れられている。したがって、ある意味で観光副読本の役目は果たしている側面もある。

指導主事のM氏の意見では、外国語の副読本として観光地を扱うことは可能ではないかとの意見を頂戴した。英語で札幌市の観光案内をレッスンする体験的な学習は大いに可能性があるとのことであった。

さらに、『みんなでまちづくりステキな“さっぽろっこ”になろうー』(全46ページ)も副読本として作成されていた。直接観光内容を扱ってはいないものの、市の魅力度を紹介したり、福祉や清掃、スポーツ振興などのまちづくりへの参加を促す内容となっている。ここに、観光振興につながる内容を導入することも可能性があると感じた。

③北海道観光推進機構

人材育成担当のT氏と面会した。T氏は観光人材育成を専門としており、初等教育段階からの北海道の人材育成には大賛成であるとの意見であった。機構では、札幌国際大学生とのコラボで大学生の人材育成をやっているが、小学生に対してはやっていない。印象に残っている小学校との関係では、観光地として有名な層雲峡のある温泉旅館のご主人が、地元の小学校に出向いて、観光教育を推進してほしい、ひいては地元の観光業者も協力したいとの意思を地元の教育界に提起したが、教育界からのよい返事は頂けなかったとの情報も得た。観光地である地元では、わが子に対する仕事理解の重要性を感じており、学校教育で観光を扱ってほしいと願っているが、これに反して教育界は課題が多岐に及んでおり、観光教育への関心度は一般に低いのではないかと感じているとのことであった。実に、惜しいところである。

当機構では、北海道を教育旅行で訪れるためのパンフレットの作成(『北海道教育旅行ガイドブック』(42頁)『同別冊』(45頁)も行っており、道外からの児童生徒の教育旅行誘致には積極的に対応していきたいとのことであった。

④札幌市立屯田小学校

筆者が訪問した2月20日は、札幌市社会科教育連盟の冬の学習会と呼ばれる定例の研究会が屯田小学校を会場に開催され、60名の小学校教員が参集した機会でもあった。公開授業も展開され、小学校社会科第5学年の単元「環境を守る」を扱った授業が参観できた。この単元は、森林の役割を理解する単元であり、社会科教科書(東京書籍)の該当ページには、家族で森林のバンガロータイプの別荘で森林浴を楽しんでいるイラストの読み取りから、授業が始まった。

単元の目標は、「日本の森林資源の働きや、育成・保護の取り組みの様子を調べることを通

して、国土に広がる森林資源が国土の保全や水資源の涵養などに重要な役割を果たしていることや、森林の育成や保護に取り組む人々の工夫や努力を理解し、環境保全のために国民一人ひとりの協力の必要性について考えようとする。」であるが、豊かな森林資源は同時に観光資源にもなり得ることから、教科書の挿し絵も、森林浴を楽しむ家族の絵が掲載されている。参考までに以下に指導案（本時）の一部を記しておきたい。

単元「わたしたちの生活と森林」 授業者 屯田小学校 似内心悟教諭

児童の学習活動	教師の関わり
<p>○本時の学習問題を提示する。</p> <p>①森林には、どのような働きがあり、</p> <p>②森林資源はどのように利用されているのだろうか？</p> <p>①森林の働き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水をたくわえ・きれいな水を生み出す ・空気をきれいにする・動物たちのすまい ・災害を防ぐ・音を吸収する ・木材を生み出す <p>②森林資源の利用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木を使った製品？ 鉛筆，椅子，楽器 ・紙を使った製品？ ノート，牛乳パック ・家などの建築材？ 桂離宮 <p>森林にはたくさんの働きがあり、私たちの生活を守ったり、森林資源によって豊かにしたりしている。</p> <p>○森林資源の量はどうなっているのかな？</p> <p>○p110のグラフ（天然林の量は変化しないが、人工林が増加している）の提示と読み取り</p> <p>○吟味する問題の提示（後略）</p>	<p>○教科書（東京書籍）の学習場面を提示し、①②の視点で学習の見通しをもつようにする。</p> <p>○①で小交流の時間を取り、書いてあることを押さえ、生活とどうかかわっているか具体的な言葉で話し合うように促す。</p> <p>○②の製品の例は、教科書以外にも生活経験から気付いたことを発表するように促す。</p> <p>○これからの林業へと視点を転換させるために、グラフを提示する。グラフは「現在」「過去」「未来」の視点で捉えられるようにする。</p> <p>○人の手で支えられていることと、「循環」の重要性については教え、持続可能な林業について考えられるようにする。</p> <p>○最後に単元を貫く学習問題に立ち戻り、自分達にもできる「適切なかわり」を考える場を設定する。（後略）</p>

屯田小学校校長室において、新保校長並びに公開授業後の研究会に出席した3名の他校の校長からも、ヒアリングを行ったが、観光を題材にした学びは札幌市の公立小学校においては教材開発を含め、授業づくりの可能性が大大であり、諸条件が揃えば、社会科を始め複数の教科・領域において教育実践は可能ではないかとの力強い意見を頂いた。

また、北海道社会科教育連盟では、これまでも「雪」や「道」をテーマとした教材開発と授業づくりを展開してきたが、観光は未来の北海道を切り拓く重要なテーマと感じているので、推進体制さえ整えば、しっかりと対応していきたいとのことであった。社会科教育連盟は、札幌市が中心ではあるものの、道内の数か所の都市に、推進に熱心な教師が研究会を組織しており、自発的な教育を行っている。主要な校長も参画しており、道庁や教育委員会、北海道開発局も協力連携しており、初等教育における観光教育実践を新たに展開する場合には、沖縄県と並んで有望な候補地となるものと思われた。

⑤北海道開発局開発連携推進課

北海道は、近代に至って開発された土地であるため、国の出先機関である北海道開発局の果たしてきた役割は大きい。特に、道路や港湾の整備、河川堤防やダム開発、空港整備、道の駅などの建設とその管理は、観光インフラの点からも大切であり、インフラそのものが観光対象となるインフラ・ツーリズムの可能性大であるエリアと言える。これまでも、小樽市や函館市の港湾施設や、稚内港にある稚内港北防波堤ドームなどは、それ自体観光ガイド本にも紹介されている観光資源であり、多くの観光客の目にとまっている。

近代的な土木遺産だけでなく、北海道独特の風景も資源として、開発局では様々な事業を展開している。その中で、シーニックバイウェイと呼ばれる風景街道事業（2017年11月現在で北海道内において13の指定ルートが設定されており、400の地域団体が関与している）は観光教育の教材にもなり得るため、注目できる。

シーニックバイウェイ北海道とは、「みちをきかっけに地域住民と行政とが連携し、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを提案する」（パンフレットより）ことを目的に推進されているもので、北海道の各地で、様々なNPO団体による観光地づくりの事例が紹介されている。

頂戴した資料の中には、「地域づくりの取組」の例として「学校シーニックバイウェイ」と呼ばれる取り組みがあり、学校で出前講座を行い、児童オススメのマップを作成する活動があるようである。北海道は、来道外国人旅行者数が平成27年が190万人であった段階を平成32年は500万人を目標に掲げている。客室稼働率の季節格差も平成27年は1.7倍であるが、平成32年には1.4倍に減らしたいと計画している。広域観光周遊ルートも計画されており、「アジアの宝 悠久の自然美への道。ひがし北・海・道形成計画」や「日本のてっぺん。きた北海道ルート形成計画」なども構想されている。

北海道総合開発計画のキャッチフレーズは、「世界水準の価値創造空間」の形成を目指す位置付けられており、世界的なブランド力・価値創造力で世界の人々に評価されることを目指している。関係資料として「北海道のサイクルツーリズム推進」や「北海道の道の駅」に関する資料も頂戴し、初等教育段階からの観光教育や観光人材育成に対し、強い関心を抱いているとの回答を得た。

Ⅲ 長崎県対馬市における観光教育調査

対馬市を調査地域の選んだ理由は後述する沖縄県石垣市と同様に、観光客、とりわけ韓国からのインバウンド客の増加が著しいからである。2016年度35万人、2017年度は38万人もの入込客がある。その内の9割が韓国からの観光客である。対馬市は、長崎県に属し、南北82km、東西18kmに及ぶ面積709km²の大きな離島であるが、韓国との直線距離は49.5kmと福

岡市との132kmに比べ、半分以下の距離に位置しており、釜山港からの定期船も就航している。

対馬は島といっても南北82kmもの距離があり、6町村が合併して対馬市が成立した事情があるため、行政機関が点在している。本調査における訪問先の一つである市教育委員会も島の中央部の峰町に位置しており、市役所本庁舎のある厳原より、バスで1時間30分も要する地点に位置していた。しかし、2017年10月に朝鮮通信使関係資料がユネスコの記憶遺産に選定されたことをきっかけに国内外からの注目を集めている島でもある。2018年度夏の教育講演会においても朝鮮通信使に関する教材開発が大切であるとの講演が協議会会長によって行われた。

①対馬市厳原小学校

校長ほかH、M教諭からもヒアリングを実施した。その結果、観光に関する直接的な学びは行っていないが、朝鮮通信使に関しては6学年で扱っている。『つしまっ子郷土読本』が発行されたので、読本+インターネット検索を行い、学芸員（県立博物館民俗資料部）からのレクチャーも得て、対馬についてまとめさせたという。5学年では、国際交流として「韓国の文化を知ろう」を扱い、対馬高校のキム教諭から簡単な韓国語を習ったりした。その際、言葉をカードに書いてオリエンテーリングを校内で実施した。

厳原小学校は、対馬市の中心集落である厳原地区の小学校として歴史を重ねてきている。学校の近隣には、石壁や寺院、記念碑、モスバーガー、免税店、ラーメン店、寿司店などが点在しており、韓国人観光客が散策する路も整備されている。児童は登下校の際や、休日に、多くの韓国からの観光客を目にしている。商店やホテル業を親が営む児童も多いことから、韓国人との直接的・間接的な交流機会は著しく多い。

公教育では、総合的学習の中で国際理解が内容例として用いられているが、単なる国際理解教育で終わりとする教育では物足りない。対馬市の未来を支えていく次世代として何が必要なのか、観光教育の地元教育界への訴求力を磨くことで、一定の観光授業がスタートできるかもしれない。これも、石垣市と同様に、何らかのイニシアチブさえあれば、当地の教員は観光内容を教育内容として取り入れてくれる可能性に富んでいると言える。

②対馬市文化交流・自然共生課及び教育委員会

係長のK氏に面会し1時間以上に渡り丁寧に應對して頂いた。K氏からは、「今回、朝鮮通信使がユネスコの記憶遺産に選ばれたことをきっかけに、韓国との交流は一層増すことが予想される。朝鮮通信使は、本州の自治体でも町おこしの題材に使用しているため、連携して盛り上げていきたいので地元の児童生徒については、大いに学ぶ価値があるテーマと捉えている。しかし、それが観光教育と結びついてはいないように思われる。現状では通信使の行列再現を祭りに実施しているが、そこに小学生が『子ども通信使』として一部参加している（市役

所職員の働きかけにより、保護者の知人の子どもたち10数名が参加)が学校をあげて組織的な対応ではない。」との意見を頂戴した。

教育委員会では学校教育課長ほか、2名の対応で聞き取りを実施。対馬市では一昨年『つしまっ子郷土読本』を刊行し、ふるさと学習の充実には努めているが、観光教育には至っていない。総合学習として各小学校別に全体計画を作成しているものの、その取り扱いが学校長の考え方に委ねられている。小学校では基礎学力である国語と算数の学力向上を最重要視しているため、総合学習や社会科には比重がおかれていない。I指導主事からは、「地元の間が対馬の価値を知らない。観光客が来島し外から刺激されつつあるものの未だ公教育では観光教育は手が付いていない。上対馬高校がかつて地元中学校と連携し韓国との交流事業を進めていたが、韓国にセオウル号沈没事件があり、韓国からの中学生の来島はなくなったのが残念である。」とのことであった。

2016年1月に発行された中心教材『つしまっ子郷土読本』(A4判 全111ページ)は、単に対馬の自然や歴史文化をやさしく解説しただけの構成ではない。中味を調べてみると一部ではあるが、観光に関する記載が見つかった。初等教育でも利用されているため、以下に抜粋する。

まず構成は、

第1章 対馬の自然

第2章 郷土・対馬の歴史(6節に分かれ74頁を割いて解説)

第3章 未来につなぐ民俗文化

第4章 対馬の楽しみ方

年表でみる対馬

で構成されている。

その中で第4章の中のp102に「対馬観光の楽しみ方」が以下のように記述されている。

「『観光』という言葉聞いて、みなさんはどんなイメージを抱きますか。現代では、一口に観光といっても、いろんな形態があり、また人によって目的も違います。(中略)日本において、一般の人でも自由に旅行できるようになったのは、交通機関が進歩し、経済的にも余裕がでてきた1960年代以降といわれています。安心して旅行するためには、国内あるいは訪問先が平和でなければならず、心身の健康も必要です。そのために『観光は平和産業』ともいわれています。(中略)近年、対馬と釜山を結ぶ船便が増えて、外国人観光客は急増しました。しかし、もっと国内観光客を呼び込み、バランスのとれた国際観光地として対馬を活性化することも大事です。そのためには、どうすればよいのでしょうか。観光地や施設・道路などの整備はもちろんです。対馬に住む私たちが一人でも始められることもあります。それは対馬について学び、愛着と自信をもって、その魅力を伝えていくことです。(中略)もうひとつ大切なのは、

清掃と『おもてなし』です。観光地や道路に空きカンやゴミ袋などが散らかっているのは、せっかくの風景も台無しになります。住民の意識の低さも疑われてしまいます。それと逆に、観光案内所や飲食店・宿泊施設などにおいて、あるいは旅先で出会ったごく普通の人や笑顔や挨拶、親切は忘れられない大切な思い出になります。(後略)」

このように、今後の観光教育推進において重要な観点は述べられていることから、初等教育における観光教育推進の足場はできていると考えられる。

③その他（厳原中学校、対馬高校、観光協会）

厳原中学校で、平成29年11月29日に開催した学習発表会において3学年は「対馬の歴史について」の劇を披露した事実があったため、シナリオを入手した。初代対馬藩主であった宗義智の物語を演じた内容であり、観光客増加については触れられていなかったものの、朝鮮通信使を大きく扱っている内容であった。劇は総合的学習で準備され、振り返り作文も得た。その中に「あなたの対馬への思いを書いて下さい。」の項目があり、一例として「今の対馬は、ほとんど韓国人のおかげでお店が閉店しなくてすんでいるだろうし、私たちも遊んでいて韓国人に話しかけられて、どうにかして会話をして美味しいお店や有名な観光スポットを教えられてとてもうれしかった。これからも韓国人との交流を増やしていけたらいいなと思った。(女子)」

「対馬は、今少子化がととも進み、高齢者もたくさん増えてきている現状があります。

しかし、2学期に学んだ対馬の歴史でこんなにすばらしい島なのにつぶしたくないので、対馬がこれからもっと活性化するために工夫しながら、観光客などを増やして明るい島のままでいてほしいです。(女子)」などの文章を得た。県立対馬高校には国際文化交流コースが設けられ、韓国人教師も採用され、韓国に関する内容を授業で扱っているという。関係者からは、「長崎県は観光立県ではあるが対馬は十分対応しきれていない。韓国からの観光客は激増しているものの、観光を学ぶ重要性和理解が市民全体には未だ乏しい。なぜ、対馬の文化や歴史を学び、観光と絡める必要があるのかを十分理解していく必要はあると感じている。」との意見を複数聞き取ることができた。インバウンドによる観光振興は同時に地元の観光価値を振り返るきっかけにもなり得ることを感じた。

Ⅳ 沖縄県石垣市における観光教育調査

石垣市を選んだ理由は、2016年の観光客入込客数が124万人と4年前の80万人台に比べ、激増しているからである。新石垣空港の開港も相俟って、八重山地域の魅力が一層、広く認められており、島内においてホテルや土産物店の増加に拍車をかけている。こうした外部条件の変化をどの程度、当地の教育機関が把握しているのか、具体的に公教育として観光人材育成にどのように関与しようとしているかについて、調査を行った。

ヒアリング調査に当たっては、石垣市教育委員会の指導主事のO氏を始め、県立八重山高等学校のI教諭並びに石垣市観光交流協会事務局長のT氏にとりわけお世話になった。

まず、沖縄県石垣市の観光動向と人材育成のための教育を概観してみたい。石垣市（人口4.9万人）は、沖縄本島よりさらに南西に位置する八重山諸島の中心島である石垣島（面積222.25km²）にあり、近接する竹富島や小浜島をはじめ、石垣島より面積の大きい西表島（面積289.61km²）ほか、多くの離島を有し、市を入口としてそれらの離島に訪れる観光客も多い。2016年度の入込客数は、124万人である。

平成28年3月に策定された石垣市観光基本計画（改定版）によると理念を「島ぬ美しゃ 心美しゃ」（自然や景観の魅力・人やその暮らしと伝統文化の魅力）に定めているように観光資源に富んでいる。魅力を創る視点としては、

「●アジアを結ぶ国際交流結節点としての国際観光の振興 ●恵まれた自然は地域発展の源泉として自然を守ること ●独自の文化を市民の誇りとして観光魅力にすること ●観光資源を生かして、総合産業としての相乗効果により地域を活性化すること ●観光客と市民の交流を深めること ●観光を命の大切さを学ぶ世界平和の架け橋とすること」の6つが謳われている。

さらに、基本目標2の主要方針5には受入体制の確立と題し、「観光地あるいはリゾート空間の魅力は感動ともてなしの伝達にあると認識しています。沖縄のもてなし文化と風土は観光魅力であり、人との出会いや再会は大きな観光動機となります。素朴で新鮮なオジーやオバーとの交流は観光題材ともなりました。本市観光における人材とは、それぞれが携わる分野や暮らしの魅力を観光客に紹介するあらゆる人々と考えます。その人材育成の基盤として、学校教育における観光カリキュラムの導入を促進し、長期的な観光認識の向上を検討した幼少期からの観光理解を進めます。」(p25)と記されており、市の方針としても公教育における観光教育の必要性が指摘されていることは特筆に値する。

しかしながら、実際の観光教育に関して小学校現場においては、組織的・体系的な指導は全くと言ってよいほど行われていない。唯一、八重山小学校社会科研究会において、筆者が2014年に来島した際に観光の学びの重要性に関する講演を行ったり、2015年に筆者による出前授業を数名の教員が参観したに過ぎない。この状況を打開するために、筆者が素案を提起し、日本初の観光教育シンポジウムを公的機関が主催者となり、開催することができた（詳細は、寺本：2017dの論文と八重山毎日新聞2017年7月14日一面記事参照）。

2017年7月、石垣市市民会館大ホールにて盛大に開催された「中学生がこれからの観光について考えるシンポジウム」（市制70周年記念事業）がそれである。このシンポジウムでは、筆者による石垣島観光をテーマにした公開授業（ステージ上）のほか、東洋大客員教授で日本観光振興協会にも勤務されていた丁野朗氏による基調講演、さらに島の観光業に関係する専門家

やホテル支配人、小学校長に加え、島の中学3年生4人を交えたシンポジウムという構成で実施された。その場に登壇した中学3年生に今回の調査で、ヒアリングを実施し、発言の背景を調べた。その際にも小学生時代に確かに『めんそーれー観光学習教材』（沖縄観光コンベンションビューロー制作）という副読本は配られていたものの、授業で習った記憶はないとの証言を得た。観光動向が著しい島であっても実際の公教育は、そのことを反映した教育はほとんどこれまで対応できていなかったと思われる。

小学校からの観光教育の連続性を視野に入れるため、市内唯一の普通科を有する県立八重山高校においては舞踊のクラブ活動を日本観光振興協会の高井氏と一緒に見学させてもらったが、舞踊そのものを楽しむ高校生の姿が印象的であったものの、生徒の観光マインドとの結び付きに関しては不明であった。

また、ちょうど滞在中に市役所会議室において開催された、市内4高校から参加した数名の地元高校生による観光プランづくりの構想発表会（市商工観光課の事業）においても、いくつかの体験観光メニューの開発はできていたものの、島の資源の見せ方や価値づけについては、考察が不十分であり課題のあるプレゼンであった。

石垣市という観光で伸び盛りの地域でさえ、観光内容が公教育に及ぼすほどの教育課題にはなっていない。このことは、学校教育が未だ、地域の課題に真剣に向きあってこなかった結果とも言える。今後、観光教育が沖縄県のような観光県で花開くためには、どのような方策が考えられるかという問題意識を持ってヒアリング調査を実施してきた。以下に、訪問先ごとに報告したい。

①石垣市立大浜小学校における観光教育の現状

今回の筆者の訪問調査に合わせて、初めて石垣市の教員による観光を題材にした授業を組み立てて頂いた。この実験的な授業の実現については、筆者が過去に出前授業などを実施してきた経緯から、そのお返しとしての意味が込められており、市内全小学校の教育課程に導入されている授業ではなく、あくまで実験的提案的な授業としての意味合いを持っていることを付記しておきたい。

内容は、5年の宜保教諭による小単元「情報化社会を生きる」のひとコマを参観させて頂いた（写真1参照）。次期学習指導要領においては、この単元で扱われる情報の事例として販売や医療や防災に加えて観光も挿入されているものの、現学習指導要領では、観光は要素として例示されていない。今回の授業は、筆者による申し出もあったが、観光教育の進展に協力したいと希望する石垣市の教員の熱意で実現したものである。



写真1 石垣市立大浜小学校5年学級における観光授業の様子

タブレットを用いて、石垣島観光プランを発表している児童（2018年2月6日寺本撮影）

事例として貴重な資料であるので、参考までに、提供して頂いた学習指導案を以下に示したい。

【資料】 第5学年 社会科学学習指導案

平成30年2月6日（火）4校時
 石垣市立大浜小学校 5年1組
 男子13名 女子15名 計28名
 授業者 宜保 勇人

●単元名 大単元「わたしたちの暮らしを支える情報」 小単元「情報化社会を生きる」

●単元の目標

- (1) 我が国の情報産業や情報化した社会の様子を調べ、情報産業や情報化した社会と国民生活との関わりについて理解できるようにする。
- (2) 社会の情報化が進展していることや、情報化した社会においては情報の有効な活用が大切であることに関心をもつようにする。
- (3) 我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料から社会的事象を調査し、情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや、情報の有効な活用が大切であることを考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

●評価の観点

関心 意欲 態度	・マスメディアを通して情報を提供している産業や情報化した社会の様子と国民生活との関わりに関心を持ち、意欲的に調べている。 ・情報産業の発展や社会の情報化の進展に関心を持ち、情報を有効に活用しようとしている。
----------------	--

思考判断表現	・情報産業の様子や情報化した社会の様子と国民生活とを関連付けて、情報化の進展は国民生活に大きな影響を及ぼしていることや、情報の有効な活用が大切であることを考え、適切に表現している。
技能	・資料やインターネットを活用したりして、我が国の情報産業や情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。
知識理解	・情報化した社会の様子と国民生活との関わりを理解している。 ・情報産業の発展や社会の情報化の進展が国民生活に大きな影響を及ぼしていることや、情報の有効な活用が大切であることを理解している。

●単元設定の理由

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領第5学年の内容のア、イをもとに設定したものであり、学習指導要領においては以下のように取り扱われている。

(4) 我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。ア 放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわり イ 情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり

本単元では、情報ネットワークを活用することで、よりよい生活を実現しようとする取り組みを学習する。なお、学習指導要領の取り扱いでは「教育、医療、福祉、防災などの中から選択」とあるが、今回は児童にとってより身近な本市の観光産業を取り上げる。iPadや地図帳、パンフレット等の資料を活用して調べ、情報化が私たちの生活に大きな影響を及ぼしていることや情報を有効に活用することが大切であることをとらえさせたい。その際に観光産業を取り扱うことで、子どもたちにとって身近な自然や食べ物、生活文化、歴史、イベント、施設といった視点で情報を調べ、情報機器を活用して調べたことをまとめて、発表する学習を行っていく。

(2) 児童観

社会科アンケートにおいては、84パーセントの児童が社会科の授業を「好き」または、「どちらかと言えば好き」と答えている。その理由としては、「自分達の地域や産業について知ることができる」、「グラフや写真をみることで発見がある」といった理由が多く見られた。またiPadや地図帳を活用した自力解決の場面でも「自分たちで調べることが楽しい」と答えた児童が73%と多いことも分かった。

一方で情報化社会やマスメディアの印象に関しては、インターネットという印象にのみ固執(89%)しており、テレビや新聞、身近な産業や自分たちの生活と関連させてとらえている児童は少なかった。インターネットで調べたり、ユーチューブ等の動画サイトを閲覧する児童は多いものの、自分たちの生活や産業と結びつけられずにいる児童が多いことが分かった。

(3) 指導観

本単元ではiPadや地図帳、パンフレット等の資料を活用して観光資源について調べることで、情報化が私たちの生活に大きな影響を及ぼしていることをとらえさせる。また情報機器を

活用して調べたことを観光プランとしてまとめ、発表することで、情報を有効に活用することが大切であることを体感させたい。

また観光産業というテーマを通して自分たちにとって身近な自然や食べ物、生活文化、歴史、イベント、施設等について調べることで、児童の関心意欲を高めると共に、キャリア教育の視点も踏まえた指導を行っていく。

本時ではペアでまとめた観光プランを発表し、全体場で思考を交流することで情報を有効に活用することの利点についてさらに思考力を深めていく。思考の交流の際には、ICT機器を活用し、視覚的に分かりやすくなるように指導する。

● 単元（小単元）の指導計画

学習事項	めあて	おもな学習活動	おもな発問例
学習問題をつかむ 1/6	身近に利用されている情報ネットワークに目を向け、学習問題をつかむことができる。	1 情報ネットワークがどのように活用されているか、という学習問題をつかむ。	「インターネットを使って、県や市で行っている取り組みを見つけましょう。」
石垣島の観光に関する情報ネットワークについて調べる	石垣島の観光について調べ、ネットワークシステムの導入が産業や人々の生活の向上に役立っていることを理解することができる。	1 情報ネットワークが石垣島の観光に、どのように活用されているのか調べる。 2 なぜ、情報ネットワークは、様々な場面で使われているのか話し合う。	「情報ネットワークは、石垣島の観光にどんな影響を与えているのでしょうか。」 「どうして、様々な場面で使われているのでしょうか。」
情報機器を活用して観光コースについて考える	情報機器を活用して、石垣市の観光について調べ、観光コースをまとめることができる。	1 情報機器を活用し、情報を収集して、まとめる。	「どのようにすれば石垣島の観光について調べ、まとめることができるのでしょうか。」
本時 観光コースについて発表しよう 5/6	情報を受けとる側や送る側の立場に立って、情報の有効な活用の仕方について考えることができる。	1 観光コースについて情報機器を使って発表しよう。	「どんなことを意識して観光コースを考えたいのでしょうか。」
学習のまとめ 6/6	調べたことをもとに、情報とくらしのかかわりや活用の仕方について、まとめのことは表現し、情報の役割について考えることができる。		

●本時の指導（5 / 6） 写真資料1参照

(1) 目標

情報の有効な活用について考えることができる。【社会的な思考・判断・表現】

(2) 準備

・電子黒板 ・アップルTV ・iPad

(3) 授業仮説

iPadを活用してペアで考案した観光プランについて発表することで、情報の有効な活用について考えることができるであろう。

(4) 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 五分	1 前時までの情報の活用の仕方について振り返る。	これまでの学習で使用したパンフレットや情報機器を確認し、児童の関心を高める。	
	2 めあてを設定する。		
	めあて 観光プランの発表から、良い情報の扱い方について考えよう。		
展開 三十分	3 見通しを立てる。 (1) 正しい情報を伝える。 (2) 必要な情報を選択する。	有効な情報の活用という視点を意識させる。	情報の有効な活用が大切であることを考えている。【社会的な思考・判断・表現】（発表・ノート）
	4 自力解決 (1) iPadを活用し、ペアごとに観光プランを発表する。	発表を通して、どんな情報の活用が大切なのか考えさせる。	
	5 思考を交流する。 (1) グループで話し合い思考を交流する。 (2) 全体の場で発表し、思考を交流する。	◎子ども同士の対話的な学び合いで有効な情報の活用について思考を深める。 キーワードを児童から引き出し、まとめにつなげる。	
まとめ 五分	6 本時で分かったことをまとめる。	児童の言葉でまとめていく。	
	まとめ 情報を扱う時は、伝える相手を意識して情報を選んだり、伝わりやすいように写真や文字等を工夫してまとめることが大切です。		
	7 振り返りを行う。 (1) 本時の学習を振り返り記述する。	振り返りの視点を意識させる。	

(5) 評価

情報の有効な活用について考えている。【社会的な思考・判断・表現】

iPadを用いた観光プランには、島の著名な観光地を訪問するプランや、市内のユーグレナモール（商店街）で食べ物や土産物の購買を勧める観光コースが立案された。児童たちの興味関心を観光という題材に、大きく引き付けることが立証された。

授業を参観していて気付いた点として、5年生児童でも容易に島内の観光プランを作成できるという事実である。初等教育段階において石垣市は、児童にとっても把握しやすい広さの観

光地である点も効力を発揮したのではないだろうか。教育学的に扱われる観光空間の規模があまりに広いと児童の認識に粗さが目立つ懸念も生じることから、適度な空間規模を題材に観光の学びが展開されることを小学校は望みたい。その点、石垣島は離島であり、把握しやすい空間の広さがある。児童も家族と島内をドライブしたり、親戚も多かったりすることから、島の地理的イメージはある程度、形成されているものと思われる。

②石垣市内中高校における観光教育の現状

石垣第一中学校を訪問し、2017年7月に市内で開催された「中学生がこれからの石垣市の観光について考えるシンポジウム」(市制施行70年記念事業)で登壇した田淵鈴夏さん(中3)ほか2人(古堅及愛さん、金城恵さん)の中学生と当山教諭と宇根教諭(理科)からヒアリングを行った。

シンポジウムで島の生物多様性に触れる優れた発言を行った田淵さんからは、「取り立てて事前の観光学習を中学校で行ったわけではなく、生徒会でシンポジストの募集があったため、挙手をして参加した。理科の研究で島のラグーンである名蔵アンパルの生物相を自由研究で深めており、島の観光開発と自然保護に関して関心があったから参加した。」との回答であった。田淵さんは、第57回沖縄県児童生徒科学賞作品展の中学生の部で6年連続の入賞を果たした生徒であり、島の生物相に強い関心を抱いている。ご父兄の職業は、エコツアーガイド会社を興しているそうである。こういった次世代が育まれていることに大いに力を得た次第である。田淵さんは、郷土芸能部にも属しており、八重山高校への進学を希望している。八重山高校郷土芸能部は全国屈指の芸能部であり、古典的な八重山舞踊の素晴らしさは、観光資源としても注目されている。今後の人材育成を考慮する上で若者たちの資質の向上は不可欠であろう。

一方、小中学校から連続する高等学校では、市内で唯一の観光コース(1学年20名)が八重山商工高校に存在する。初等教育における観光人材育成と高等学校商業科観光コースへの進学との関連について指導教員(Y教諭)に意見を求めるために面会した。観光コース在籍はわずか一学年17名程度であるが、観光で変貌する石垣市の貴重な人材供給の場となっており、地元を知ること、コミュニケーション能力伸長、国際感覚、英語教育などの基礎教育と将来のキャリア形成の点からも初等教育からの観光教育に大いに期待しているとのことであった。ちょうど、ヒアリングに伺った際には、観光コースの授業で、インターネットを用いて台湾観光情報の収集と手づくりの旅のしおりを作成していた。観光コースに属している生徒たちは、女子高校生が過半数を占めていたものの、楽しそうに学習に取り組んでいた。観光の学びは、主体的で対話のある楽しい学びであるため、これからの教育界にふさわしい題材でもある。各学校段階において、もっと多様な教材と指導方法の確立が望まれる。

③石垣市教育委員会及び石垣市文化スポーツ部商工観光課・観光交流協会

『観光学習教材』（沖縄観光コンベンションビューロー制作）は、11年前より県内の小学4年生全員に配布（29年度は1万6400冊作成）されているが、石垣市では筆者が出前授業を展開してきたものの、市内の教師が講師となって実施してはいない。教員たちは、石垣市の観光動向に関心はあるものの、日常の多忙化の中で、観光教育の指導カリキュラムの作成と実施枠は設定できていない。

しかし、可能性がないわけではない。石垣島は八重山地域の主島であり、宿泊施設も多い。今後も3つのホテルが開業する予定である。当地の小学生は近い将来、島の観光を支える人材として成長するはずである。どの産業に就職するにせよ、観光は間接的に関わる産業である。観光市民の卵として成長する児童に観光教育を授ける時期になっている。

残念ではあるが、2017年、7月13日に初めて市制70年記念事業として「中学生がこれからの石垣市の観光について考えるシンポジウム」を開催してもらったものの、今後の観光教育の振興策については未定とのことである。石垣市は観光教育の展開において、大きな可能性を秘めた自治体であることに間違いのないと思われるが、次の一手が期待される。

V おわりに

文部科学省は2018年10月1日に開催された中央教育審議会初等中等教育分科会の教育課程部会で、総合的な学習の時間を地域等と連携して子どもたちが学校外学習を行った場合、休業期間中でも四分の一程度まで授業時間数に位置づけることを認める通知を出した。家庭や地域との連携が充実している場合には、学校等の判断により、学校外での学習も授業としてカウントできる。これにより地域の教育資源の活用による学習の多様化が進展すると共に夏休み等を活用しつつ、週当たりの授業時間を増やさないで弾力的に授業を計画できるとした。これは観光業が地域のリーディング産業である自治体にとって朗報である。子どもたち自身が、地域に出かけていき、観光ガイド体験や観光関連機関や業者を取材できるからである。実際には、夏休み等のまとまった時間が確保できる時期に、何らかの観光を題材とした学びが学校外との連携により実現できる。総合的な学習の時間の活性化にもつながり、教科横断的な学びの有効化にもなる。上記で紹介した3市などではとりわけ有利になることだろう。普段の教室内での社会科や外国語、総合等の学習で、観光地や観光資源についての理解を深め、接遇・ホスピタリティの態度も副読本や視聴覚教材を活用して学べるものの、学習の効果はそれほど高まらないだろう。実効性をあげるためには、ラーニングピラミッドという学習の定着率を示す図で言えば、一番基底に位置づく、「学んだことを他の人に教える」（定着率90%）を想定することが大事となろう。つまり、観光地に出向いて、実際に子どもたち自身が観光客と対面して観光ガイドを実施することが観光の学びの実効性を高めることにつながるからである。3市の教育関係

者と観光関係者の双方が連携して観光の学びを是非、実現してほしい。そのことが、地域の未来を支える人材の育成につながり、子どもたち自身の多角的な思考と学びに向かう態度を育むからである。

謝辞

本調査研究は、2017年度、日本財団から日本観光振興協会に委託された委託助成金及び2018年度配分の文部科学省科学研究費基盤研究(C)「ESDに立脚する小中高一貫した観光教育のカリキュラムの構築」(課題番号18K11848)の一部を使用した。短い期間に北海道札幌市、並びに長崎県対馬市、沖縄県石垣市を訪問できたのは、貴重な機会となった、記して関係者の皆さまに感謝の意を表したい。

参考文献

- 森下晶美編著(2008):『観光マーケティング入門』同友館, 165p.
- 深見聡(2014):『ジオツーリズムとエコツーリズム』古今書院, 197p.
- Hawaii Tourism Authority(2015): Vision 2015, Tourism Workforce Development Strategic Plan The Journey to Excellence. pp. 1~15.
- 寺本潔(2015): 自県の資源と世界遺産の価値に気付く小学校社会科・観光授業, 『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第5号, pp. 33~44.
- 寺本潔ほか(2016): 小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究—沖縄県を事例に一. 『玉川大学学術研究所紀要』第21号, pp. 1~18.
- 田本由美子・寺本潔(2016): 『資源はっけん! 観光学習—沖縄県石垣市立石垣小学校4年の実践を中心に—』(日本離島センター平成27年度離島人材育成基金助成金報告書) pp. 1~32.
- 寺本潔(2016): 沖縄県石垣島の資源を活かした地域観光学習の試み—小学校4年生を対象にして—. 『地理学報告(愛知教育大学地理学会)』第118号, pp. 99~104.
- 宍戸学・西恵里奈編(2016): 『観光ビジネス実践ワークブック マイス・ビジネス編』横浜商科大学, pp. 1~49.
- 寺本潔・澤達大編著(2016): 『観光教育への招待—社会科から地域人材育成まで—』ミネルヴァ書房, 165p.
- 大島順子(2016): 観光の教育力の構造化に向けて. 『観光科学(琉球大学)』第8号, pp. 73~86.
- 奈須正裕(2017): 「何を知っているか」から「何ができるか」への学びの転換を『Newえるふ』14号, ちゅうでん教育振興財団, pp. 1~4.
- 福本賢太(2017): 観光甲子園』事業に関する考察, 『日本観光ホスピタリティ教育学会』第10号, pp. 15~23.
- 中村正人(2017): 『「ポスト爆買い」時代のインバウンド戦略—日本人が知らない外国人観光客の本音—』扶桑社, 255p.
- デービット・アトキンソン(2017): 『世界一訪れたい日本のつくりかた』東洋経済新聞社, 321p.
- 寺本潔(2017a): 観光の教育力と教材開発による人材育成—那覇国際高校(SGH)での出前授業を通して—. 『論叢(玉川大学教育学部紀要)2016』pp. 101~116.
- 寺本潔(2017b): 島の栽培植物と寺院の観光資源としての価値に着目した学び—沖縄県石垣市の小学校4年生への出前授業を通して—. 『論叢(玉川大学教育学部紀要)2017』pp. 37~61.
- 寺本潔(2017c): 観光の学びで学力向上を. 「琉球新報(論壇)2017年9月23日朝刊 紙面.
- 寺本潔(2017d): 社会科・観光学習を通して島の発展につながる人材育成—沖縄県石垣島の小学6年

- 生への出前授業と中学生観光シンポジウムを振り返って一、『論叢（玉川大学教育学部紀要）』第17号, pp. 37～56.
- 田川博己(2018):『観光先進国をめざして—日本のツーリズム産業の果たすべき役割—』中央経済社, 273p.

The Current Status and Issue in Tourism Education of the Elementary School: From the Field Investigations to Three Cities: Sapporo, Tsushima, Ishigaki

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

Tourism Education of the elementary school doesn't locate formally in the subject and the territory. Tourist spots and tourist resources are only described in the textbook in Four grade of the social studies. It is treated as a case study based community development between nature and tradition culture. This paper approaches the notion of tourism learning in the field of social studies. The investigation in three cities have been executed from the point of view of the human resource development which supports tourism. Need and effect became clear about the introduction to the curriculum as that result.

Keywords: human resource development, tourist spots, tourist plan, map, social studies